

離郷と帰郷のあいだ——太宰治『竹青』におけるノスタルジア

Between Exodus and Homecoming : On Nostalgia of Osamu Dazai's "Chiku-Sei"

趙 松娟

TYO Syoken

要旨 本研究は主に1940年代の太宰治の作品『竹青』と初出文末の「自注」に注目し、第二次世界大戦下で、敗戦色の濃厚になりつつあった日本の時代状況と結び合わせ、文学大衆化の動きがまだ一般的ではなかった当時の中国のインテリ読者に伝えるメッセージを掘り起し、1930・40年代において日本では盛んであった愛国心、郷土教育の視点から当時社会での「帰還兵」と「新沃土」「新天地」の開拓を目指した「満州移民」の歴史問題に即して先行研究をまとめた上で、現在、この作品から読みとれる可能性を論じた。特に、主人公が立身出世の夢を諦めて帰郷し、再び「故郷」を出ることがなかったというラストシーンの設定は、「敗戦」という終わりの後の始まりを意識した太宰が、戦後への平和な日常を再建する構想を穏当な表現で政治的な正しさを追究するため、戦争末期の状況下において巧みに語ったという結論を導いた。

はじめに

『竹青』は1945年4月1日発行の「文芸」第二巻第四号（通巻六号）の「作品特輯」欄に発表された短編小説であり、『薄明』¹⁾に副題を削除して収録されたのち、『花燭』²⁾に再録された。この作品はその四年前に発表された『清貧譚』に引き続き、清の蒲松齡『聊齋志異』に取材し、「新曲聊齋志異」のサブタイトルが付されている翻案小説である。津島美知子の愛蔵書、蒲松齡著、田中貢太郎訳『聊齋志異』³⁾を参考して書かれたといわれる。この『聊齋志異』の訳本には三十四篇が収められていたが、『竹青』はその第十四篇目にあたるもので、オリジナルに忠実な訳であった。太宰は田中貢太郎のこの訳文を参考にしながらも、自由な解釈を施したわけである。

それゆえ、今まで多くの先行研究では、普通、オリジナルとの相違や、ほかの中国文献との関連を中心に据え、また、作家の戦時下における創作態度や人生観、作者自身の作品への投影を指摘して結論とするものが殆どであった。従って、『竹青』が発表された戦時下という非常時と当時の歴史背景に則して十分な考察を行う研究は存在しないといえる。

しかし、『竹青』の初出本文末尾には、「自注。これは、創作である。支那のひとたちに読んでもらひたくて書いた。漢訳せられる筈である。」⁴⁾とある。今までの先行研究では、漢訳してほしかった太宰の真意と、刊行予定の「大東亜文学」はどんな雑誌であり、いかなる読者層を想定していたのかということについては、明確な結論は出されていなかった。

1) 太宰治『薄明』（1945年11月、新紀元社）

2) 太宰治『花燭』（1948年1月、思索社）

3) 蒲松齡著『聊齋志異』（田中貢太郎訳、1929年11月、北隆堂書店）

4) 本論では太宰治の『竹青』の引用文は1990年6月27日、筑摩書房の初版第一刷発行の『太宰治全集第七巻』によるものである。後文でも明確に引用頁数を表記した。

本稿では「発話のポジション」について、「誰がいつ、何を目的にして、どのような主張を行っているか」⁵⁾という問い続が重要であるとする太田好信の指摘をふまえ、作品が創作された時代背景、作家の境遇及び読者に伝えたかったメッセージを再検証し、太宰の『竹青』の現在なおあらたに読み解かれる可能性を模索する。

一 太宰の『竹青』と先行研究

まずは物語のアウトラインを簡単にまとめる。主人公の魚容は、貧困の境遇にあるものの、君子の道に志す気高い品格を持つ儒家社会で理想的な書生として描かれ、「大学の道は至善に止るにあり」「父母在せば遠く遊ばず、遊ぶに必ず方有り」「逝者は斯くの如き夫、昼夜を捨てず」など儒学の名句を口ずさんだ漢籍高い文人である。

悪妻に苦しめられ、立身出世を求めて「錦を飾る」思いで、二回にわたって家を飛び出した魚容は郷試に参加する。しかし、二度と落第してしまう。物語の設定では、一回目の落第で帰郷した途中、夢の中で一匹の鴉になり、「竹青」という雌鴉と夫婦となって愛し合ったが、出し抜けの過失で死んでしまうところ夢が醒めた。さらに、三年後の試験に再び失敗して洞庭湖に身を投げようとしたところ、神女になっていた竹青の誘いを受け入れて漢陽にある竹青の家に赴く。

魚容は、そこでゆったりした暮らしをしていたが、やがて望郷の本心を悟った後、竹青の諭しの許で帰郷すると、もともと醜くかった妻が、心身一変して竹青そっくりの美しい女性になっていた。一年後に、男の子が生まれると魚容はその子に「漢産」という名を付けた。その名の由来は、神鳥の思い出と共に、それは魚容の一生の尊い秘密として誰にも語られなかった。その後、魚容はしばしば主張していた「君子の道」も封印し、ごく平凡な一田夫として暮らした。

従来、中国において「竹青」は『聊斎志異』の一部としてそれほど注目されてはこなかった作品であった。1990年代末から日本で文学研究を行う中国人留学生を中心に注目されるようになり、研究成果が急速に深まりを見せている。郭斐映「太宰治と蒲松齡その妖怪的文学」がその最初であると思われるが、二の論文の中で、郭はオリジナルの「直線的」な構造に対して太宰の『竹青』が「円環運動の中に回収され」、「現実と非現実との絶対的な関係そのものを相対化する」「巧みに「幻想」と「現実」とを両立した」⁶⁾と論じた。

また、この作品では『聊斎志異』のほか、『論語』『大学』『中庸』『楚辞』、唐詩からの引用も多いため、考証の作業を中心にした先行研究も少なくない。村松定孝は「夫婦の調和を重んじたメルヘン風な心なごむエピソード」⁷⁾が書き加えられた点に特徴を見せていると論じた。また、大野正博は、「教訓はまさしく霊・肉の対立を意味している。それはキリスト教的な二元論による蒲氏の相互依存的発想への峻拒である」⁸⁾と論じた。大塚繁樹はこの小説の主題について「俗世間や家庭を脱離しようなどとせず、妻と平凡な生活をする所に人間の幸福があるということにあり、人間界肯定の傾向を強く帯びている」⁹⁾こと

⁵⁾ 太田好信『トランスポジションの思想—文化人類学の再想像—』(1998.5、世界思想社、6頁)

⁶⁾ 郭斐映「太宰治と蒲松齡 その妖怪的文学」(『太宰治』第6号、1990年6月、洋々社、27-120頁)

⁷⁾ 村松定孝「太宰治と中国文学—「清貧譚」と「竹青」について—」(『比較文学年誌』5、1969年3月、81-94頁)

⁸⁾ 大野正博「聊斎志異「竹青」について—太宰治の「竹青」との比較—」(『集刊東洋学』、1973年6月、168-181頁)

を指摘する。その上で、これが「人は人間界を離れて鴉化し、神鴉と変わるところに幸福がある」ことを示した典拠の主題を「逆用」した太宰による主題の「近代化」とであると結論した。

また、中国における先行研究では陳明姿は「伝記的にロマン的な『聊斎志異』の『竹青』に対し、太宰の『竹青』は比較的に俗世的な現実性を備えている。」¹⁰⁾と述べた。これらの先行研究で共通しているのは二つの作品を比較し、両者の結末の相違に注目した上で、太宰がオリジナルを翻案した趣旨を論じたことである。

本論では、以上のような先行研究の成果を踏まえた上で、太宰の『竹青』における宙吊りされた結末部に注目し、考察を行いたい。

二 「故郷」への帰着とノスタルジア

『竹青』の結末において主人公の魚容は異郷の生活を諦めて自分の生まれ育った故郷に帰り、「極めて平凡な一田夫として俗塵に埋もれた」とされている。このことは従来の先行研究ではしばしば魚容における「現実世界への注目」「人間性への回復」として結論付けられてきたが、本論文ではこの作品が執筆された社会背景に基づいて夢幻性と現実性との両立した故郷への帰着というラストを通して太宰が読者に伝えるメッセージについて考察する。

1. 戦時下を書くことの緊張感

1937年7月、盧溝橋事件とその後に続く太平洋戦争の拡大に並行し、日本では軍国主義が急に進み、文学に対する権力の抑圧は飛躍的に強められていた。1940年12月、内閣情報局の監督下に、統一的な出版団体である日本出版文化協会が設立された。1941年6月の出版用紙配給割当規定により、同協会の査定に合格しなければ紙が配給されなかったため、出版は言論と物資の両面で制限された。雑誌は次々と統廃合され、タイトルも敵性語が禁止される。この時期、作家やジャーナリストは様々な思惑を持ちつつも、翼賛団体に参加してゆく。1943年12月に内閣情報局の指導下で大日本言論報国会が設立された。会長は徳富蘇峰で、会員には評論家、新聞社の論説委員、大学教授らが名を連ねた。同じく、徳富蘇峰を会長とする日本文学報国会は従軍作家らの「ペン部隊」を前身とし、本人の了解を得ず、ほとんどすべての作家が名を連ねさせられた。¹¹⁾ 基本的に戦時下の出版は、すべて戦意高揚と、国家総動員を推し進めるために組まれたのである。特に1944年から1945年までの間、軍国政府からの圧力を受け、多くの作家が殆ど作品発表の場を失っていた。太宰が1946年5月1日発行の『東西』第一巻第二号の「文学的通信」欄に発表した「返事の手紙」には、「私なども、雑誌の小説が全文削除になったり、長編の出版が不許可になったり、情報局の注意人物なのだそうで、本屋からの注文がぱったり無くなり、そのうちに二度も罹災して、いやもう、ひどい目にばかり遭いました」¹²⁾と記している。こうした言葉から

⁹⁾ 大塚繁樹「太宰治の『竹青』と中国の文献との関連」（『愛媛大学紀要文科学』、1963年12月、47-55頁）

¹⁰⁾ 陳明姿「太宰治の竹青と聊斎志異の竹青」（『中外文学』34(5)、2005年、160-176頁）

¹¹⁾ 平成27年度国立国会図書館特集展示「1945終戦の前後、何を読み、何を記したか」
<http://www.ndl.go.jp/jp/publication/biblos/2015/10/10.html>

¹²⁾ 関井光男「解題」（『太宰治全集10』第10巻、1982年12月、558頁）

は戦時下における統制の厳しさが垣間見える。一方、戦争に奉仕させるために多くの職業作家が戦地に派遣され、戦争報告宣伝の「戦記文学」が書かれるようになった。一部分の作家は軍国主義の呼びかけに応じ、自発的に軍国宣伝者とスポークスマンの行列に参じた。この時勢の下で、火野葦平の『麦と兵隊』を先蹤とする戦争文学が出現する。これらは見掛けの上では民衆の視点からするルポルタージュの形式を取りながら、民衆に実感的に依拠する姿勢を示すだけで戦争に対する根源的な批判の成り立つ視座を持たなかった。これにより、かえって戦争文学はにわかに隆盛を見せる。そういう見掛けの繁栄の中で、大政翼賛会の結成に象徴される権力による文化統制が強化され、それに応じて文学者の武装解除にほかならぬ国策文学が現れることになった。これに対して多くの作家は一時的に筆を置いて沈黙することによって抗議を表そうとした。時局の高圧的な統制のもとで軍国主義の戦争思想に一致しない沢山の優れた作品が出版を禁じられていった。このような時勢にあって、太宰の精力的な作品執筆、発表のありかたは例外的である。この点について加藤典洋の『敗戦後論』では高く評価し、次のように述べる。「太宰が、戦後新しく現れた文学に著しい違和感を抱いていたことは、その書いたものに明らかで、その違和感のため、彼は彼と同様の受け止め方をした作家たちとともに、無頼派という不思議な部屋に隔離されるのだが、その無頼派の主要な書き方である坂口安吾、石川淳らとも、太宰は、実を言うと、一つの点で違っている。坂口も、石川も、戦後文学の小説家たちと同様、戦後、戦時下のことを描いた作品を残している。坂口の「白痴」「戦争と一人の女」「続戦争と一人の女」、石川の「無尽燈」などは、戦争中の生活を一つの小説として描いたもので、これをざっと読むだけではそれが戦後に書かれたか戦時下書かれたかわからない。しかし、太宰は、戦時下こそ戦争中の話を書いているものの、戦後になると、一度もそのような戦時下に書いたかどうかわからないような形での、戦争中の話は、書いていないのである」¹³⁾では、太宰が戦時中という非常時においてどのようにして執筆を続けていたのか。このことは『竹青』が発表された頃のいくつかの別の作品からうかがわれると考える。

まず、時間をさかのぼってみると、『清貧譚』の冒頭に「私の新体制もロマンチシズの発掘にはないようだ」と記した。この「新体制」とは1940年6月、強力な指導政党を中心とするあたらしい政治体制の「革新」を目指す「新体制運動」のことである。文部省検定済みの高校歴史教科書は「一九四〇年十月に新体制運動は大政翼賛会として結実した。しかし、大政翼賛会は当初目指した政治組織ではなく、総裁を総理大臣、支部長を都道府県知事とし、部落会・町内会・隣組を下部組織とする官製の上位下達機関となった。のちには、大日本産業報国会・大日本婦人会・大日本青少年団・町内会・部落会（隣組）など、あらゆる団体をその傘下におさめ、戦争遂行のため、国民を動員するのに大きな役割をはたした」¹⁴⁾と解説した。「新体制運動」¹⁵⁾が喧しい時期において、太宰が自作の冒頭でわざわざ「新体制」という言葉を使ったのは国家の政策の流れに乗るというより、むしろユーモラスにその時期の自分の作風の変化動向または作品の位置づけを言ったのではないであ

¹³⁾ 加藤典洋『敗戦後論』（1998年1月、講談社、97-98頁）

¹⁴⁾ 『詳説日本史』著者には石井進、笠原一男、児玉幸多、笹山晴生がいる。1993年文部省検定済み、山川出版社により、1997年3月1日印刷、同年3月5日発行された。

¹⁵⁾ 「新体制運動」については先行研究に指摘あり、松本和也『昭和一〇年代の文学場を考える』（2015年3月、立教大学出版会）の第11章を参照する。

うか。

また、1945年2月から7月にかけて執筆され、敗戦直後の10月、筑摩書房から刊行された『お伽草紙』の「前書き」や「瘤取り」の冒頭部分では次のように記される。

「あ、鳴った。」

と言って、父はペンを置いて立ち上がる。警報くらいでは立ち上がらぬのだが、高射砲が鳴り出すと、仕事をやめて、五歳の女の子に防空頭巾をかぶせ、これを抱きかかえて防空壕にはいる。既に、母は二歳の男の子を背負って壕の奥にうずくまっている。

「近いようだね。」

「ええ。どうも、この壕は窮屈で。」

「そうかね。」と父は不満そうに、「しかし、これくらいで、ちょうどいいだよ。あまり深いと生埋めの危険がある。」

「でも、もすこし広くしてもいいでしょう。」

「うむ、まあ、そうだが、いまは土が凍って固くなっているから掘るのが困難だ。そのうちに」など曖昧なことを言って、母を黙らせ、ラジオの防空情報に耳を澄ます。

母の苦情が一段落すると、今度は、五歳の女の子がもう壕からだしましょう、と主張しはじめる。これをなだめる唯一の手段は絵本だ。桃太郎、カチカチ山、舌切雀、瘤取り、浦島さんなど、父は子供に読んで聞かせる。¹⁶⁾

ここに描かれているのは、まさに太宰が防空壕でこの原稿を書いていたということである。実際に太宰は各地で罹災しながら書き続け、同時に出版の作業も進めていた。日本での空襲については、1942年の4月から日本本土への空襲がはじまり、1944年11月ごろから東京への空襲が激化し、敗戦の日まで繰り返し行われていた。

こうした戦時下で、太宰は1939年9月東京府三鷹に転居してから、『津軽』『お伽草紙』などの創作活動を継続した。1945年3月5日前後、『竹青』を脱稿し、3月6日には、連日の空襲警報の中で、引き続き『お伽草紙』の稿を起こした。3月10日、東京市の市街地は焼夷弾約二十万個が投下された大空襲を受けた。火は強い北風に煽られ、大火災となり、推定死者数は十万以上である。こんな厳しい日の午前、太宰は『文芸』¹⁷⁾編輯部の野田宇太郎に約束の『竹青』の原稿を渡した。野田は「河出書房が焼けているかもしれないが、たとえどうであっても文芸は刊行するつもりだ」と語ったという。さらに同日、下谷区読売新聞出張所で罹災した小山清に会う。「妻子を甲府に疎開させることを強く勧められ」、「真赤に燃える東の空を望み見」た太宰は妻子を甲府市の石原家に疎開させることを決意し、3月末に実行に移す。3月11日、『お伽草紙』の「前書き」を書き終え、「瘤取り」を二、三枚書き始めた。4月2日、三鷹も空襲を受け、その後、太宰も甲府に居を移す。「瘤取り」は「奥の六畳を仕事部屋にして」書き継がれ、5月7日に脱稿する。翌日、「浦島さん」の執筆開始、5月末から6月初めには、「カチカチ山」の執筆を開始した。6月中

¹⁶⁾ 『太宰治全集 7』（1982年2月、筑摩書房、296-297頁）

¹⁷⁾ 『文芸』は1933年に改造社により創刊されたが、その後、1944年から河出書房が引き継ぐ形で刊行を開始、1957年に河出書房新社となった際に休刊したが、1962年に復刊し現在に至っている。当初は月刊誌だったが、1980年代なかばからは季刊誌となった。

旬から月末にかけて「舌切雀」を書き上げ、『お伽草紙』全四篇二百枚を完成している。脱稿直後の7月7日未明、甲府市は焼夷弾攻撃を受け、石原家も全焼の憂き目に遭った。太宰は逃げ出す際、長女を背負った上に、『お伽草紙』の原稿を持ちだした。これはのちの自慢の種であったという。戦火を免れた本書の原稿は見舞いに駆けつけた小山清に託される。7月13日、原稿は小山清によって無事に筑摩書房へ届けられた。このような経緯からも太宰が戦時中に罹災しながらも作品を執筆し続け、それを発表するまでの困難さが読み取れる。焼け出された太宰一家は7月28日から早朝、甲府を出発して東京・上野経由で津軽に向かった。¹⁸⁾そして敗戦後の1945年11月まで津軽に疎開していたという。

また、もう一つの作品『薄明』では、三鷹の家から甲府に避難しに行き、とうとう甲府の家までも焼けてしまった戦争の激しさをありありと描いている。この二つの作品から窺われるのは、戦争中作家が一人の普通の庶民として罹災していた戦時下における生活であった。

2. 故郷へのアイデンティティの呼び覚まし

『竹青』は日本の敗勢が極まり、空襲で主だった都市が焦土と化し、国民生活が極限状態に陥った頃に、発表された。執筆された時期については、1944年8月29日堤重久への葉書に「二、三ヶ月中に、『津軽』と『雲雀の声』が小山書店から、『新釈諸国断』が生活社から出る。そろそろ魯迅に取りかかる。いまは小手調べに支那の怪談など試作している。これは支那語に翻訳される筈¹⁹⁾とされていた。先行研究では、この「支那の怪談」を『竹青』のことであると見なしている。また、1945年2月11日付の堤重久宛手紙には、「いま魯迅の仙台時代を扱った長編を書いています。もう十日ほどで出来上がりましょう。すると、次に『お伽草紙』という変わった仕事にとりかかります。」とある。「文藝」四月号の野田の「後記」には、「三月十日の敵機東京来襲の日を中心にこの号の作品はすべて書き上げられた。平静な思ひなくしては文学創作はできない。」とあり、同誌奥付には「昭和二十年三月廿日印刷」とある。こうして、『竹青』は1945年の2月から起筆され、3月5日頃、脱稿したと推測されている。…「創作年表」の「一九四五年」には、「正月号」の項に「小説（漢文／竹青）大東亜文学30」、「四月号」の項に「小説（漢文／竹青）文藝30」²⁰⁾とあり、初出「竹青」本文末尾の「自注」と照らし合わせると、太宰はこう書けば、こう読むであろう、こう語れば、こう来るという読者意識のツボを心得ているということが読み取れる。また、これまでの太宰の記録に従って、1945年1月に、漢訳「竹青」が「大東亜文学」に発表されたと推定されてきた。しかし、『竹青』は「支那語に翻訳」されていたかどうか、先行研究では明らかにされていない。ここでは、実際に漢訳されたかどうかということにこだわらず、先述のように漢訳してほしかったという太宰の動機と加えて刊行される予定の「大東亜文学」とはどのような性格の雑誌であり、そこではいかなる読者層が想定されていたのかに注目しておきたい。

「大東亜文学」という雑誌が発行された背景について考える上では、まず戦争中、日本

¹⁸⁾ 山内祥史『太宰治の年譜』（2012年10月、大修館書店）

¹⁹⁾ 「八月二十九日 東京都下三鷹町下連雀一一三より 京都市左京区聖護院東町二〇 三森豊方 重久宛」（『太宰全集11』1985年2月、筑摩書房、265-266頁）

²⁰⁾ 同16）。

文学が中国にどのように紹介されたかについて言及する必要があるだろう。1937年の盧溝橋事変から1945年の戦争終結までの間、日本文学の翻訳は主に日本の占領地区に集中し、日本の学術団体の援助を受けて行われていた。日本近代作家の交流と文学作品の翻訳は当然戦争による大きな影響を受けたと考えられる。ことに、北京や上海など主な被占領地区では、日本帝国主義の軍事的、政治的戦略の先導下で、日本文学が積極的に中国大陆に紹介された。²¹⁾1944年9月1日発行の「文学報国会」第三十四号の「華文文芸雑誌『大東亜文学』創刊一堂々たる編輯内容—」によれば、「本会発行事業の一たる満州、中国向華文文芸雑誌（月刊）『大東亜文学』は、大東亜文学者大会の刺戟により中国和平地区に起こりつつある新文学運動を助成善導し、対重慶牽制の知識層工作を活発に推進するための最上の武器として」発行されたもので、「創刊号は十月初旬現地に於いて発売される」²²⁾予定であったようである。従って、この『大東亜文学』に発表された作品の読者層は、日本と中国のインテリ層だと想定されていた。いうまでもなく『竹青』も同様に漢訳されてインテリたちに読まれることを望んでいたわけである。では、このような出版条件の制約のもとで、太宰が自分の作品を中国人読者にも設定したことには一体どんな意味があったのか、小説の結末部分を踏まえながら、具体的に考察を行う。

本文では主人公魚容は二度出郷し、出郷者の身分で、異郷に暮らす、最後にはあまりよい思い出の残らなかった故郷に帰り、落ち着いた暮らしに戻る。こうした結末のあり方を魚容の出郷動機と異郷にあった時の生活のありように注目しつつ論じていきたい。

初めて出郷する際、魚容は故郷において「小さい時からただ人に叱られて育ってき」て（133頁）「いまは親戚一同から厄介者の扱いを受け」て（131頁）、妻に家事をさせられ、「何の面白い事もなく、我が故土にいながらも天涯の孤客の如く」という思いであった。

出郷する動機といえば、「毎日毎日、忍び難い侮辱ばかり受けて」、「いつまでもかのような惨めな暮らしを続けていては、我が立派な祖先に対しても申し訳がない」という反省と「そろそろ三十、而立の秋だ。…一奮発して、大なる声名を得なければならぬ」（132頁）という決意と世間話ばかり聞かされた女房への反発ともいえるであろう。女房を殴って家を飛び出し、満々たる自信を以って郷試に参加したが、空腹のために、「しどろもどろの答案しか書けなかったの」（132頁）通らなかったのである。帰郷すれば、同郷人に嘲笑されることや、女房にひどく罵倒されることを案じて異郷の道に辿り着いた。故郷に帰ったら、「故郷の人たちは格別うれしそうな顔もせず」、「冷酷の女房」にも「庭石の運搬」をさせられた。

二回目に故郷に帰った時も「青雲の志を抱いて」（138頁）試験に参加したが、やはり落第した。「二度も続けて落第して、何の面目があっておめおめ故郷に帰られよう」（139頁）という悲しい心境と「故郷に帰れば、またどんな目に遭うかわからない」という心配に気が揉めて、故郷に帰りたくなかった。

異郷の漢陽にいた間、理想の豊かな暮らしができたのだが、その美しい景色を醜い女房と共有したい感情が湧いてきた。その醜い女房の存在こそ故郷の象徴だと言えるだろう。まさに竹青が指摘したとおり、魚容にとっては、「自分の故郷にだけ人生がある」（141頁）

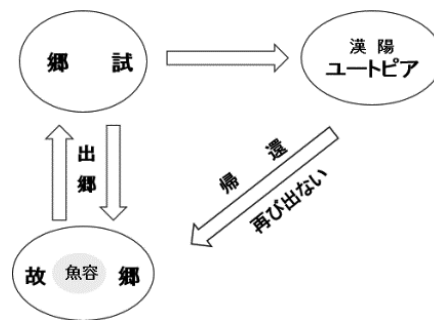
²¹⁾ 同16)。

²²⁾ 劉春英「抗日戦争期の中国における日本文学の翻訳」（安村久代訳、編者：山田敬三。呂元明『十五年戦争と文学—日中近代文学の比較研究』1991年2月、東方書店、291-300頁）

のである。

ここで考えられることは二点ある。一つは、「父母存せば遠く遊ばず、遊ぶに必ず方有り」という竹青の異郷へ向かう誘いに対しての答え、もう一つは「あなたには、お父さんもお母さんもないくせに」に反問された時の魚容の答え、すなわち「故郷には父母同様の親戚の者たちが多勢いる。乃公は何とかして、あの人たちに、乃公の立派に出世した姿をいちど見せてやりたい。あの人たちは昔から乃公をまるで阿呆か何かみたいに思っているのだ。さうだ、漢陽へ行くよりは、これからお前と一緒に故郷に帰り、お前のその綺麗な顔をみんなに見せて、驚かしてやりたい。ね、さうしよう。乃公は、故郷の親戚の者たちの前で、いちど、思いきり、大いに威張ってみたいのだ。故郷の者たちに尊敬されるといふ事は、人間の最高の幸福で、また終極の勝利だ」という発話内容である。ここには故郷へのこだわりが人一倍強い魚容のありようが窺われる一方、同郷人たちの前で、立派になった現在の自分を自慢したいという欲望も垣間見える。つまり、魚容の故郷への恋着は単に「錦を飾る」ことへの執念だといえるのではないか。

続いて作品内における主人公魚容の移動のありようについて考えてみたい。



〈図1〉

図1のように、作品では「夢の世界」(ユートピアとしての漢陽)と「現実世界」(故郷)が最後にうまく融合することになった。戦時中、胸部疾患のため、徴用を免除となった太宰は中国に行くことはなかったが、実体験がないからこそ、幻想的でエキゾチックな漢陽のイメージを紡ぎ出したのだといえる。異郷の色が濃ければ濃いほど、異郷と故郷が鮮明に相対化され、故郷が一層理想化されるのである。醜い妻・同郷人がいる故郷と女神竹青と住まう異郷、それぞれ異なる機能を備え、役目を果たしている。つまり、現実世界の妻と異界の女神という二人の女性に施された物語の仕掛けである。主人公魚容は現実世界での落魄が「異郷」で癒される。「故郷」では持ちえない尊敬と高い身分を得て、女神の竹青と夫婦敬愛しあう暮らしをしていたが、素朴なノスタルジアによって、「故郷」と命運を共にする意欲が湧いてきて帰郷するという選択をした。最後に「親戚のものたちにはやはり一向に敬せられなかったが、格別それを気にするふうも無く」、同郷人としての一体感を得て物語を終える。

元来、日本では凡人が仙人に会ったことで運命が好転した伝説は多くはない。例えば、『浦島伝説』でも、浦島太郎は人間界に戻って平凡人として死んでしまう結末である。御伽話の浦島太郎はほかに『日本書紀』にも『万葉集』にも収められているが、物語の結尾は大体同じである。主人公は仙女の言いつけを守らなかったために仙境へ戻れなかった。『万

葉集』にはこの水江の浦島の物語が具体的に記されている。「春の日の霞める時に、住吉の岸に出」て浦島太郎が鯛、鯉取りに出掛け、七日の間、海をさ迷った。途中海神の娘に出会い、夫婦の約束を交わし、常世の国の宮殿で老いも死もないこの上ない優雅な生活を送っていた。しかし、しばらくすると、浦島は急に年老いた両親のことが心配になり、帰郷を神女の妻に申し出る。妻が言うには「もう一度この地、この宮へ来て、私と一緒に暮らしたいと思うなら、今お渡しいたしました手箱を決して開いてはなりません。この玉手箱を開けばなにもかもが過去に戻って、家も村も元通りになるかもしれない」。こうして浦島太郎は故郷へ帰ったが、三年とはいうものの、自分の家はなく村もすっかり変わり果てていた。そこで、玉手箱をそっと開けて見るとさっと一筋の白雲が出て、常世の国、海神国の方へと流れてゆく。「しまった」と思ったがもう遅い。瑞瑞しく若かった肌は皺だらけとなり、黒髪も白く、何より精気が失われ、ゆなゆなと足取りもおぼつかなく命絶えてしまったという。²³⁾ 太宰もこの古典に取材し、『お伽草紙』中の一編「浦島太郎」を創作した。

この二つの作品ともに主人公が現実世界に戻り、普通の凡人のように老いて死ぬようになった点で共通している。しかし、このような物語の結末の一致は同時代の言説状況からいうと偶然のことではない。

3. 愛郷心から愛国心への飛躍

『竹青』が発表される前から、「故郷」「郷愁」という言葉はしばしば太宰の作品に登場する。1944年11月、小山書店から『新風土記叢書』の第七編として刊行された太宰の第四の書き下ろし長編小説である『津軽』の創作は、彼に故郷への再発見の契機を与えた。この叢書は『津軽』のほかに、宇野浩二『大阪』（第一編、1936年4月）、佐藤春夫『熊野路』（第二編、1936年4月）、青野季吉『佐渡』（第三編、1937年11月）、田畑秀一郎『出雲・石見』（第四編、1938年8月）、中村地平『日向』（第五編、1939年6月）稲垣足穂『明石』（第六編、1940年4月）の全八冊が刊行された。高橋孝次によると『新風土記叢書』の刊行は「1930年代国家主義の高まりのなかで、「郷土」という概念」が「[国家]という全体へ編入しようとする」²⁴⁾という同時代状況があり、「風土記」によって読者が「郷土」への〈共同性〉を、「郷土的文学」を媒介として享受するというプログラムである。最終的には読者に「日本人」という〈共同性〉を再発見させ、「故郷への愛着をよびさまし」、それがさらに神国日本をあらためて見出させる契機となると指摘した。『津軽』の「序編」で、「或るとしの春、私は生まれてはじめて本州北端、津軽半島を凡そ三週間ほどかかって、一周したのであるが、それは私の三十幾年の生涯に於いて、かなり重要な事件の一つであった。私は津軽に生まれ、さうして二十年間、津軽に於いて育ち（中略）…ここには、私の叔母がいる。幼少の頃、私は生みの母よりも、この叔母を慕っていた」²⁵⁾と述べた太宰は、

²³⁾ 坪田譲治著『日本童話集：桃太郎：一寸法師：浦島太郎：花咲かじい：他』（『世界少年少女文学全集』28、日本編1、1954年8月、創元社）

²⁴⁾ 高橋孝次『『明石』と『津軽』—新風土記叢書の「郷土」』（大原祐治編『日本文学と故郷/郷土』千葉大学人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書第297集、45-59）高橋によると、1945年4月に、前田出版社から再刊された際、「聖戦下の新津軽風土記」と言った時戦時色の濃い表現は修正された。ただし、現在、流通するテキストは修正前のバージョンである。49頁。

²⁵⁾ 同16）。3-167頁。

これをきっかけとして、生まれてはじめて、彼の故郷である津軽地方を旅し、そして、津軽の歴史や文化、彼の思い出などを交えて、紀行文のようにまとめた。高橋が論じたとおり、「実際に津軽を旅して、友人たちと同様の津軽気質を自らの中に再発見する太宰治は出郷者の視点と在郷者の視点を交錯させることで、「故郷」の〈共同性〉への反発と帰属意識を語り、都市と農村の関係を転倒させ、タケとの再会によって「故郷」への愛着と紐帯の物語」²⁶⁾であった。太宰はエッセイ『自著を語る』²⁷⁾において、「最近故郷津軽半島の三厩、今別、龍飛迄、西は深浦から小泊迄、自分にとっては思ひでの地を遍歴したのですが、それが『風土記津軽』となってでることになっています。旅行記めいた風土記です。

少々津軽の悪口を書きました。郷里のことを一冊にまとめたのはこれが最初です。処女作の『思ひ出』や『佳日』のなかにある『帰去来』『故郷』など郷里のことを書いた創作もありますが、何と云っても郷里は下手なんです。柄になく論語をひっぱり出しますが、『孔子於郷党恂恂如也 似不能言者』と言ふ言葉があります。孔子様ですら郷党の前ではこんな有様です。然しまた、『子曰、郷原徳之賊也』と云っています。」と著している。

これは『竹青』の中で主人公の魚容が漢陽に行く前に、竹青が「どうしてそんなに故郷の人たちの思惑ばかり気にするのでしょうか。むやみに故郷の人たちの尊敬を得たくて努めている人を、郷原といふんじゃなかったかしら。郷原は徳の賊なりと論語に書いてもあったわね」(141頁)と話した内容と同じである。やはり故郷に帰りたいのはむしろ生まれ育った故郷への美しい憧憬であると言っているだろう。端的に言えば、いかに故郷で女房と同郷人に苦勞をかけられても、望郷の念に抗うことはできないのだ。戦後、太宰は平野謙、坂口安吾、織田作之助のと共に参加した座談会では「ホームといふのも僕はいちらしいものがあると思ふのですよ。たとへば、僕たち旅行をして歩いておって、ポーッと窓に明かりがともっているのを見て、なにか郷愁をそそられることがありはしないかしら。ああいふのはやはりホームのいちらしさだと思ふけれども…」²⁸⁾という箇所がその論拠となるだろう。つまり、ロマンテックな表現の裏面に潜んでいるのは故郷への眷恋のリアルな感情であった。これを文末の「自注」を考えあわせると、一体太宰がどのような読者を想定していたのか、という光景が浮かび上がってくる。

成田龍一氏は「故郷」・「ネーション」／「愛郷心」・「愛国心」を結びつけて「「故郷」の営みに先行して、ネーションの営為がすでにあるのだ」と論じた。成田が目にしたのは1880年代日本における「故郷」の概念の成立と郷土研究の活発化及び同郷会の誕生と同郷会機関誌の発行である。同郷会の機関誌には、「故郷」／愛郷心と、ネーション／愛国心の関係が見出される。愛郷心と愛国心は一身・一家・一郷・一郡・一県／日本という審級をもって語られる。また、「我国」「我郷」をいうことにより、「国」「郷」を自明ものとしたうえで、さらに「愛」という「吾人ノ本性」を介在させ、「われわれ」と「我国」「我郷」を結合していくのである。さらに、一郷一國の文脈で「公共心」を定義しており、「故郷」と国家が公共性において、連結させるとともに、身命を投ずる人びとの自発的な行為と公

²⁶⁾ 同24)。49頁。

²⁷⁾ 1945年1月1日発行の『月刊東奥』第七巻第一号の「自著を語る」欄に発表された。初出本文には「日本文学の伝統に根ざす」という見出しが付されているが、標題は掲載欄名に據った。本論文の参考文献は1982年12月、筑摩書房によって刊行された『太宰治全集10』である。

²⁸⁾ 『太宰治全集10』(1982年、筑摩書房、501-520頁)

共性を結びつけて「故郷」・国家に回収される。²⁹⁾

このような成田の指摘する愛郷心とナショナリズムの結合は、その後も教育が介在することで、さらに強固なものとなっていく。大原祐治が『太宰治「走れメロス」における「村」と「市」』で論じるように1930年代から1940年代前半にかけて「故郷」という主題は様々な領域において前景化し、それが「日本（的なもの）」というナショナルな問題へと接続される動向を見せてゆく。大原が例示するのは、1910年に刊行され、以後何度か改訂されながら戦前の高等小学校で使用され続けた教科書『高等小学読本』の巻一に収められた「故郷」と題した文章である。

人一度故郷を離るれば、故郷の風物は常にその心中に往来す。嬉しき時にも故郷を思ひ、悲しき時にも亦故郷を思ふ。…

故郷は我が出生の地を中心とすれども、その範囲一定ならず。一郡より見れば、村は即ち故郷なり。世界より見れば、国は即ち故郷なり。故に、故郷を愛する心は即ち国を愛する心なり。³⁰⁾

以上のような同時代の言説状況をふまえれば、『竹青』の主人公魚容は単に愛郷心をそられて「故郷」に回帰したのではなくて、功を立て国へと凱旋することを望んだと読まれる可能性もあるのではないだろうか。

三 平和待望の「兵士」帰還

ここで改めて『竹青』の結末を確認しよう。あれほど自信満々、意気高揚の心持ちで青雲の志を目指して出郷したはずの魚容が、最後身を立て、名を上げるという夢をあきらめて、「故郷」でごく平凡な日常には甘んじたというのは、いかにも寂しい感じを与える。これはおよそ「凱旋」とはいえない終わり方である。この結末部分から一体何が読み取れるであろうか。

1. 「銃後」における「帰還兵」

ここで視点を少し転じてみよう。魚容を故郷に帰ることを勧めた神の代言者竹青は「あなたの居場所はここではない。自分の故郷に帰ったら、自分にふさわしい幸せが待っているのよ。」というメッセージを発していたのではないだろうか。

魚容が故郷で真の幸せを得たというラストは戦時下という大きな時代状況の中で、どういう意味合いを帯びていたのだろうか。すでに確認したように、太宰が『竹青』に描いたのは、主人公である魚容が立身出世をあきらめ、帰郷して穏やかに暮らすことになるという物語であった。魚容の物語は国家への愛と愛郷心を同心円状に重ね合わされていくような同時代の言説とは異なる形で「ふるさと」への帰還を示す物語だったといえるだろう。それは「凱旋」の華やかさとも、ナショナリズムの狂躁とも無縁の静かな帰還の道を示す物語であった。

²⁹⁾ 成田龍一『「故郷」という物語 都市空間の歴史学』（1987年7月、吉川弘文館、1-100頁）

³⁰⁾ 大原祐治「太宰治「走れメロス」における「村」と「市」」（大原祐治編「日本文学と故郷／郷土」人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書第297集、2016千葉大学大学院人文社会科学研究所、3頁）

ここで想起されるのは、前述した『お伽草紙』³¹⁾の中の「舌切雀」の冒頭文で太宰が「桃太郎」を扱わないことについての意図を説明してことである。即ち、御伽噺中の「桃太郎」は、勇ましくて戦いに長けるイメージを帯びている。当初、太宰は「あの鬼ヶ島の鬼といふものに、或る種の憎むべき性格を附与し」、「どうしてもあれは征伐せずには置けぬ醜怪極悪無類の人間として、描写」して「それに依って桃太郎の鬼征伐も大いに読者諸君の共鳴を呼び起こし、而してその戦闘も読む者の手に汗を握らせるほどの真に危機一髪のもの」(235頁)にしようと考えたが、この構想を放棄する。桃太郎の勇ましさを拡大して仕組むなら、それは戦争を遂行する当局の意向とも合致したものになっただろう。しかし、太宰は実際には「太郎のあの「日本一」の旗を思い浮かべるに及んで、潔く「私の桃太郎物語」の計画を放棄した」のである。(238頁)これは太宰が戦争を謳歌せず、戦意昂揚に加担しなかったことの証左となるであろう。

ここで改めて『竹青』の内容に立ちかえってみる。『竹青』の主人公魚容は、どうしてもそんなに郷試に夢中になったのか。中国では古くから「科挙」といった官吏登庸の試験があった。受け継ぐ資格がある官吏世家の貴公子のほか、庶民の読書人は普通、登竜門のようにこの科挙試験に合格することを通して大いに自分の生家を輝かせたり、政治理想を実現したりするように目指したのである。科挙試験は当時の支配者の人材選抜の戦略である。いわば、読書人にとっては科挙試験への道はまるで「兵士」が戦場へ赴くのと同一ことなのである。ならば、魚容が名声を求めて郷試に参加するさまは、戦場へと赴く兵士の姿に重なり、また故郷に戻るその姿は、あたかも帰還兵の凱旋のようである。

戦時中における「帰還兵」の問題について、大串潤児は『銃後』の民衆経験—地域における翼賛運動』³²⁾において、日中戦争開戦後に形成され、アジア太平洋戦争の末期に崩壊していく「銃後」という社会との関わりの中で論じている。大串によれば、1939年から40年にかけて、日本軍の兵站線はのびきり、かつ軍事動員が限界に達したことで、「帰還兵」の問題が世上で賑わしくなっていた。戦場経験者が大量に銃後に帰って来た戦時中の「兵士の帰還」の問題を詳しく論述した作品執筆時の時代状況から考えれば、魚容のありようは、こうした帰還兵の姿と少なからず重なるといえるだろう。

しかし、魚容の人物像が現実の「帰還兵士」と些か異なるところもある。国民精神総動員という風潮の下で、兵隊になれるということは当時の社会では、現代青年として欠かさない要素を備えていることだと見なされている。徴兵の招集令状が届いて、兵士が出征するには、常に地域住民の盛大な見送りが行われた。このように華々しく送り出された兵士が、戦果を挙げて帰還するにあたって、一体どのように戦時体制を下支えした「銃後」の社会に遇されるのであろうか。

兵士の帰還が1937年の徐州作戦終了後から始まると、帰還兵は、銃後の地域社会において重視された。当時の地域民衆は、帰還兵士を駅まで出迎え、歓迎会を開いて戦線の話語り、盛んに座談・講演会を催した。無論、無事帰還した兵士の家族や縁者たちの喜びを押しとどめることはできない。さらに、軍隊時代の階級が地域社会でもついてまわる。とくに農村部では、「あの人は一選抜で上等兵になったそうだ。やはり嫁にやるからそう

³¹⁾ 太宰治。太宰治全集第七巻。筑摩書房初版第一刷発行、1990.6.27. 235-260

³²⁾ 大串潤児『銃後の民衆経験—地域における翼賛運動』(2016年5月、岩波書店)

人でないと」³³⁾といった調子であった。一方、帰還兵は戦場と銃後をともに経験していたから、立派な完全なる銃後人となりうる資格を十分に備えていることだと見なされて、戦争を支えていた「銃後」社会の担い手になる存在でもあった。帰還兵が「死」のリスクに直面した戦争体験を経て帰郷するということは、「故郷に錦を飾る」ことに他ならず、凱旋後の彼らには優秀で一人前の人物として遇される地域社会での生活が待っていた。

帰還兵にとって、戦争体験は誇りの種だったのである。では、翻って考える時と、魚容の帰還はどのような意味を持つのだろうか。帰還兵が激しい戦線から戦果と共に凱旋したのに対し、魚容は試験に敗れた後、理想郷としての漢陽に辿り着き、そこで人生の至上の幸せを手に入れるというまわり道をしてから故郷に帰還している。このことにはどのような意味を読み取ることができるだろうか。

2. 新天地を開拓する可能性

理想郷という言葉から同時代的に連想されるのは満州移民という当時の国策の存在である。満州事変の直後の1932年、満州国が建立されると、同年、満州への移民が「武装移民」として始まり、1936年に「20ヵ年100万戸移民計画」として国策化された。この政策は、当時の帝国議会の承認のもと、貧農排出と国防のために策定されたが、移民の主導権は関東軍が握っていた。この戦時政策を実現するのに、満州開拓移民の募集には、「王道楽土」「五族協和」などをスローガンとして、満州を「新大陸」や「楽園（ユートピア）」や「新しい沃土」のように喧伝するキャンペーンが大々的に行われた。このように、政府が宣伝メディアを動員したことも功を奏して多くの人々が募集に応じ、満州への移住・入植が相次ぎ、人口も急速に増加した。

しかし、異国の地である満州に移民した人々の生活は一体どうであったのだろうか。川村湊が指摘したように、「農業移民が現地で地主—小作関係を再生産させるということは、日本の農業の制度的矛盾の解決を目指した満州移民にとって、明らかな政策的な矛盾であり、植民地を否定しようとした日本にとっても、言い逃れようのない植民地的収奪といわざるをえない。」³⁴⁾第十三回大佛次郎賞を受賞した井出孫六の長編ルポルタージュ『終わりのなき旅—「中国残留孤児」の歴史と現在』³⁵⁾では、苛酷な現実を生き抜いてきた分郷開拓団の悲劇を描いた。『後世に伝う血涙の記録 満州泰阜分村』³⁶⁾は、手記、聞き書き、座談会などの形式を通して、当時の分村移民の送出経過を記録する。泰阜分村大八浪開拓団の農業経営や満州の厳しい自然条件、現地民からの拒絶などという困難重々の開拓生活が描かれている。確かに一つの村の歴史とはいえ、実際には域を越えた日本全国での開拓団の歴史の縮図だといえる。満蒙開拓団のある女性の手記によると、『『幸せ』だ、と感じたこ

³³⁾ 小熊英二『生きて帰ってきた男—ある日本兵の戦争と戦後』（2015年6月19日、岩波書店）著書には日中戦争以前は、日本軍は予算枠が限られていた。そのため、定員も多くなく、陸軍士官学校を出た現役将校と甲種合格の現役兵で構成され、兵士は二年在籍すれば軍隊から除隊できた。しかし戦争の拡大とともにそれが困難となり、「三年兵」や「四年兵」が多くなったし、第二乙種の体格の悪い兵士が徴集されるようになった。戦局悪化とともに、一度除隊になった兵士や退役した将校が、戦力として再度召集された。参照68、81、104頁。

³⁴⁾ 川村湊『異郷の昭和文学』（1990年10月、岩波書店、55-56頁）

³⁵⁾ 井出孫六『終わりのなき旅—「中国残留孤児」の歴史と現在』（1986年3月、岩波書店）

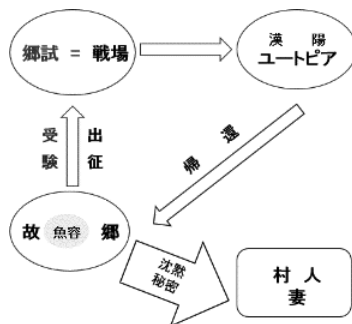
³⁶⁾ 泰阜分村記念誌編集委員会『後世に伝う血涙の記録 満州泰阜分村』（1979年2月、信濃文化経済社）

とは、一度もない」「これまで生きていて、『幸せ』だと思ったことはない」という悲惨な言葉が綴られる。そこには「王道楽土」として描かれた満州の理想と相反する満州移民の惨めな生活実態が明らかとなった。そこで、日本軍部が、国民を戦争に猪突させる前駆措置として扱っただけで、「漢陽」のような美しい「ユートピア」の「新天地」は実際には存在しなかったのである。

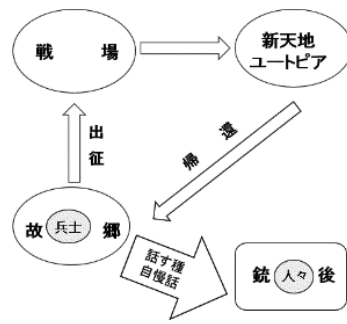
終わりに

ここまで見てきたように、魚容を「帰還兵」の隠喩として理解するなら、彼は「戦場体験」に相当する栄光の記憶を一切語らず、故郷で平凡な日常を過ごしたことになる。「漢陽」での幸せな生活は自慢話の種として大いに故郷の人々の前で話せるはずであるが、なぜ魚容は沈黙したのか。

作品の構造と戦時下の帰還兵の出征ルートをそれぞれ〈図2〉〈図3〉で示してみよう。



〈図2〉物語の中の魚容



〈図3〉戦時下の帰還兵

「帰還兵」の魚容はこれから一生、自分の故郷から離れることはないであろうと想像される。すなわち、魚容が再び「戦場」に赴くことはないのである。戦争がなくて、平和な生活を送れるようになる。これは、戦争を生き抜いてきた帰還兵の日常生活へスタートした戦後の世界への帰還、または平和の行方を暗示したものではないか。戦争の終わりの後の始まりを意識した太宰が『竹青』を通して日本の読者に伝えるメッセージは、戦争を生き抜いてきた人々が、「帰還兵」と力を合わせて自分の故郷、国で、戦争がもたらした災難を乗り越えて、これから平和な日常生活の構築に務めようということだろう。また、漢訳して中国人の読者にこの平和な日常生活の構築のメッセージに共鳴を覚える願望が潜んでいると思う。さらに、主人公魚容の往還した漢陽がユートピアの表象であり、それが当時の大陸志向の人たちにとっての満州であるなら、満州移民という侵略の本質が体得できなかった日本人は結局そこに留まり続けることはできず、いずれ故郷に戻って静かに暮らすことになるのだというメッセージが読み取れる可能性もあったはずなのである。

さらに、国、戦場、故郷、美人を共に愛するヒーローより、むしろ故郷記憶の中の醜い妻のもとに帰還する人のほうが一般的であり、親しみやすい。平凡人の愛郷心は一般民衆でもインテリでも比較的に共鳴を覚えやすいのである。村人と最愛の女房に何も語らないことは魚容が試験という「戦場」に別れを告げることであろう。さらに、これから故郷を出ないことは、戦争に永遠に別れを言うことであろう。何も言わないことこそ、魚容の愛

郷心を一番輝かせたのであり、故郷、国への平和の希望である。これが太宰治がわざわざ魚容に沈黙させた理由ではないであろうか。従って、しばしば庶民の善意やその哀しみや喜びに身を寄せるようにして書き続けてきた戦時下の太宰は、醜い妻が竹青にそっくりになった理不尽な設定を通して、上層の軍官とか指導者の目より庶民の、まさに大衆の中の一人として、検閲と言論統制の当局の目を潜んで、その本音とも言うべき部分をさりげなく、巧みに語っていたのではないか。